

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

生徒が考え、自ら成長する 「理想のクラス」を追いかけて

徳島県立名西高校 河野 豊司 KAWANO TOYOJI

「クラス担任が一番やりがいがある」。ベテランと言われる年齢になってもそう語る教師は多い。だが、教師の醍醐味だからこそ、最も難しい役割だともいえる。若き日に先輩が築いた理想のクラスに出合った教師が、今日まで続く探求の日々を語る。

若き教師ゆえの壁



今から18年前、講師として徳島県立阿波高校の教壇に立つ

たその年に、私は教師人生を通じて追いかける理想のクラスに出会いました。

佐々木尊先生が担任を務める1学年のクラスでは、生徒が教師の言葉の意味を考え、自主的に動いていました。皆いつも笑顔で「こんなクラスで学べたら、どんなに楽しいだろう」と私がうらやまほどでした。一見生徒をぐいぐい引っ張る雰囲気でありながら、生徒が考える余地を残した言葉掛けを行う佐々木先生に、私は自分が目指すべき教

師像を見つけました。

翌年、県内の普通科高校に新任として赴任し、続いて昼間定時制高校の教壇に立ちました。生徒の状況が異なる2校で担任を務めました。目指したのは佐々木先生のクラスでした。そして5年の時を経て、私は再び佐々木先生のいる阿波高校に戻ることにしたのです。

ところが、1学年担任となった私は、担任、校務分掌、部活動の並立に忙殺されました。特に顧問を務めたソフトテニス部が全国レベルの強豪だったこともあり、私は次第に部活動に心血を注ぐようになったのです。クラスに掛ける時間が足りなくなり、夏を迎える頃には自分は担任としてどうすればよいのか

分からなくなっていました。

私は佐々木先生に自分の苦しみを打ち明けました。私の話にうなずく先生を見て、「クラスはもっと副担任に任せればいいと言ってくれるのではないかと期待していました。

しかし、佐々木先生はこうおっしゃったのです。「若いうちは何でも挑戦しないと。担任が自分の可能性信じられなければ、クラスの生徒の可能性を信じることも出来ない」と。私はハツとしながらも、「自分も手助けするから、頑張ろう」と続ける佐々木先生の言葉から私への期待も感じました。また、話したことで気持ちが楽になったことも事実でした。

翌日から、私はいつの間にか

おろそかにしていた担任としての役割を見直していききました。

例えば、毎朝笑顔で教室に行く。目立つ子だけでなく、地道に努力する生徒にも声を掛ける……初心を思い出して、一つずつしっかりとやっていこうという気持ちを取り戻していました。

ゴールは存在しない

翌年、3学年の担任になった時も、佐々木先生の言葉に助けられました。受験を控えた3年生には、お互いを支え合う雰囲気が必要です。しかし、私のクラスの生徒の表情は固く、「高校生活を楽しんでるのだろうか」と不安を感じる状況でした。悩んだ末、私は再び佐々木先生に相談しました。

先輩教師の言葉

若手への期待と
自らの失敗を礎に
助言した

徳島市立高校・教頭
SASAKI TAKASHI 佐々木 尊



阿波高校には教科指導、クラス運営など各分野で秀

でた教師が多かったです。だから河野先生は、講師の頃から担任になったときのことを考えて、先輩教師の姿を追いかけていたのだと思います。

河野先生が理想だと言ってくれた私のクラスには、自分の考えを持った生徒がたくさんいました。その上、行事などではしっかりと結束するのです。生活記録などを通して日々の生徒理解にも努めました。生徒から学ぶことのほうがたくさんあったようにも思っています。

私から見れば、河野先生は阿波高校に戻ってからも活気のある素晴らしいクラスをつくっていました。特に応援合

左 ささき・たかし 化学科。阿波高校に12年勤務。その後、県教育研修センター、教育委員会学校政策課を経て、2009年より徳島市立高校教頭。

撮影◎阿波高校にて

右 かわの・とよじ 公民科。初任は富岡東高校。城東高校北島分校(2002年8月閉校)を経て、阿波高校で11年勤務。2010年より名西高校。今年度は2年生担任を務める。

佐々木先生は「クラスが楽しければ、生徒は学校を楽しめるし、学力も自ずと向上する」とおっしゃいました。担任の私に、入試で良い結果を出したいという焦りがあり、それが生徒に影響していたことを見抜いたのでしよう。生徒が、この高校で良かったと思えるクラスをつくることに注力しよう……先生の言葉で、担任として一番大切な仕

事がはつきりとわかりました。私が佐々木先生の言葉に励まされ、クラスに笑顔で戻ることが出来たのは、私が佐々木先生を心から信頼していたからです。今、自分が若い先生に言葉を掛けるとき、よく当時を思い出し、それだけの信頼関係を築けているだろうかといつも自問しています。クラスの生徒への声掛けも同僚への声掛けも、

きつと同じなのだと思います。18年間、私も多くのクラスを受け持ちました。阿波高校で3年間持ち上がったあるクラスは、40人中36人が現役で国公立大、難関私立大に進学し、浪人した4人も翌年には国公立大に進学するという結果を残すことが出来ました。リーダーを中心に生徒が自分で考え、行動するそのクラスはとても楽しい雰囲気

気で、社会人になった今でも連絡を取り合う関係です。それでも私には、佐々木先生の中のクラスはもっと輝いていたように思えるのです。クラスの活気は合格実績のように数字で表せませんし、ここまで出来ればいいというゴールもありません。困難だけれど追いかけていがある永遠の目標を、先生にいただいたのかもしれない。

戦での団結力などは学年で一番でした。担任と部活動顧問の両立は大変だったと思いますが、若い先生にはよくある悩みです。河野先生なら必ず乗り越えられると思います。自分の経験から言えることをそのまま伝えました。次の阿波高校を支える先生だと信じたからこそ、やってみてほしいと期待していたのも事実です。

「クラスが楽しくなければ学力は向上しない」という言葉の裏には、私の失敗経験があります。河野先生が戻ってくる前、私はある成績上位クラスを担任しました。気負いから学力偏重の学級経営をした結果、生徒の数が「来年はこのクラスから出たい」と申し出てきたのです。生徒にとってクラスの居心地が悪ければ、学習どころではないのだと思います。

近年、人間関係づくりが苦手な生徒が見受けられます。しかし、生徒がクラスに安らぎや自分の存在意義、そして充実感を求めていることは変わっていません。一人ひとりの生徒をよく見て、全員が「楽しい」と感じられるクラスをつくる必要があります。担任の力量が、今まで以上に問われているのだと思います。